



青

い

祭り

り

風

児

不

弔

王

東口

地元の神社のお祭りは意外に人出が多い。国道沿いの歩道には家族連れやカップルが溢れ、中には車道を歩いている人もいる程だ。



昼間の、神輿を担ぐ威勢の良い賑わいも好きだけれど、夕暮れ時に、外灯の間に吊るされた提灯の列がぼんやりと浮かび上がり、出店の裸電球が眩しく煌めく風景、それが僕は小さい頃から特に好きだった。



夜に出歩くスリルと、なんとなくワクワクする開放感。お祭りだからこそ許される夜遊び。それが夏休みの楽しみの一つでもあった。

いつもの年は、友達数人と屋台巡りをしたり見せ物小屋を見て回ったりするのだが、小学五年生のこの夏は、一人でじっくりと楽しむ事にした。

付き合いが悪いとかなんとか、親友の亘に少し文句を言われたが、キッパリと断った。たまにはいいじゃないか、一人で静かにじっくりと味わってみたいんだ。小さかった頃のように。

ジーンズのポケットには千円札が一枚と五百円玉が一つ。祭りを楽しむには十分な軍資金だろう。

まずは得意中の得意、金魚掬いから行こう。僕の行く店は毎年決まっている。鳥居をくぐってすぐの所だ。

見回すと周りの人達のお椀には数匹ずつの金魚。ふふーん、と鼻を鳴らし余裕の笑みを浮かべると、黒いTシャツの半袖を肩まで捲り上げ、いざ戦闘態勢に。



お金を払ってポイを受け取り、金魚が泳いでいるプールの端っこに陣取る。ここが僕の指定席だ。

ポイの裏表を確認すると、左手でお椀に水を入れてスタンバイOK。さっそく技を披露する。

金魚を隅に追い込み、素早く頭からまとめて掬う。一気に五匹。まだポイは半分しか濡れていない。二度目の動作で四匹。三度目で四匹。ここでポイに少し破れが入るが、ここからが見せ所。

ポイの枠の部分を上手く使い、一匹ずつ次から次へとお椀に放り込んでいく。程なくお椀の中は芋洗い状態になる。

周りのギャラリーが沸き立つ中、切りが無いので、頃合いを見計らって自らお開きにする。

僕は金魚は持って帰らない事にしている。釣りで言うところの、キャッチ&リリースってやつだ。

お椀ごとの屋のおじさんに金魚を返すと、「去年も来たよね？ 和弥くんだったっけ？ 相変わらず上手いねえ。来年もきっとおいでよ」と笑ってお金を返してくれた。

どうやら僕の事を覚えていてくれたらしい。常連気分で、ちょっと嬉しかった。僕は意気揚々と、次へ向かった。



次はちょっと怖い見せ物小屋。〈蛇女〉だって？
蛇と人間の合いの子だろうか？ 怖い物見たさ、好奇心に火がつく。

入場料を払って見せ物小屋の中に入ると、立ち見で並んだ大人の間をすり抜けて前が出る。ズルだけど、そうしないと子供には立ち見じゃ見えないから仕方がない。

僕の身体が最前列まで抜け出た時、すでに見せ物は始まっていた。

客席から三、四メートル程離れた小屋の真ん中で、着物を着た髪の長い女の人が蛇をもてあそんでいた。身体に巻き付けたりして、まるでペットと遊んでいるようだった。

あの方が蛇女だろうか？ でも普通の女の人だな。

そう思ったのも束の間、突然小屋の中に悲鳴と驚きの声が沸き上がった。

その女の人が、いきなり蛇の頭に噛み付いたからだった。噛み付いて、あろう事か、歯を剥き出して蛇を喰い千切った。

分断された胴はクネクネとうねり、白い腕に赤い血を塗り付けながら絡みつく。蛇女は赤々とした口から蛇の頭を吐き出すと、観客に高々と見せつけた。

そしてなんと、その頭をギュウギュウ詰めになった観客の中へと放り込んだのだ。

悲鳴がいくつも上がり、蛇の頭が落ちた辺りから人の波が押し寄せて来る。まるで満員電車のようなひしめき合いだった。

蛇女はそれを見て妖しく微笑むと、今度は蛇の胴を歯で噛み裂いて、その皮を剥き始めた。

「げっ！」

という声があちらこちらから上がる。

とうとう蛇女は蛇の肉を食べ始めた。そしてここで見せ物は終わり、外へと出された。

グロテスクで、残酷で、僕は少し気分が悪くなった。

櫛の大木の側で深呼吸をして気分を落ち着け、射的へと向かう。

射的も僕はけっこう得意で、ジッポのライターは毎年必ず手に入れている。もちろんライターなんて子供には使い道が無いんだけど、僕らにとっては、それを手に入れる事自体に意味があった。

お金を払いコルクの弾を受け取ると、銃を慎重に選ぶ。バネがヘタっているのは駄目だからだ。

じっくり見て、ようやく決めた銃に手を伸ばした時、いきなり目の前に真っ白な細い手が現れ、僕の手重なった。ほんの一瞬の事だったけれど、華奢で柔らかな滑らかさ、そして心地よい温もりを感じた。

「あっ！ ごめんなさい！」

直ぐさま引込められたその手の主を見ると、白地に赤い絵柄の入った浴衣を着た女の子だった。驚いた顔が、けっこう可愛い。

「あ、ど、どうぞ」

僕は、どもりながら、その女の子に銃を譲る。

なぜかドキドキしてる。

「いえ、どうぞ」

女の子も僕に譲ろうとする。

「京香ちゃん、使わせてもらったら？」

聞き覚えの有る声が、その女の子の後ろから響いた。

そこには見覚えの有る顔が……。

「え？ 優花ちゃん？」

近所の幼なじみ、優花ちゃんだった。

いつもはボーイッシュな格好で、竹を割ったようにサッパリとした男勝りな性格なのに、それがいつもと違う髪型と髪飾りで赤い浴衣に包まれると、まるで別人のように、しとやかに見えた。



「和弥、サンキューね！」

「あ……、ああ」

僕が面食らった顔をしていると、銃を京香という子に手渡ししながら優花ちゃんが言葉を付け加えた。



「和弥、この子はね、あたしの従姉妹の京香ちゃんって言うの。同じ五年生よ。夏休みでうちに遊びに来たんだ。どう？　可愛いから見とれちゃうでしょ？」

「えっ？　あ……、あの……」

ヤバイ、凶星だ。顔が赤くなっているかも……。

言葉に詰まっている僕を見て、優花ちゃんは嘔き出した。

「プッ……、和弥、マジで赤くなってやんの！　京香ちゃん。コレ、近所の幼なじみの和弥。シャイだけど、けっこういい奴だよ」

からかわれているんだか誉められているんだか判断しかねていると、京香ちゃんの方から声をかけてきた。

「はじめまして、和弥くん。よろしくね！」

笑顔も声もなかなか可愛い。いやマジで、すごく可愛い。

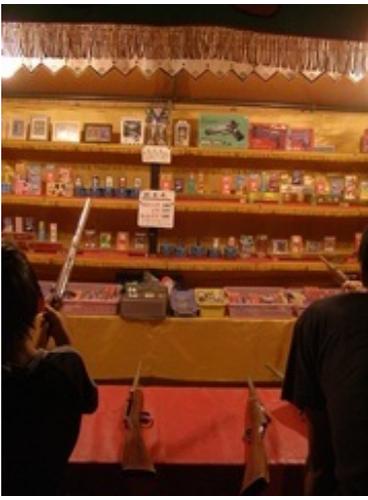
「い、いや、……どうも」

あー、マジヤバイ……。耳まで熱いや。

僕はあまり女の子と話すのは得意ではない。やっとの事で一言二言応えたと、残った銃に視線を逃がして選んでいる振りをした。が、頭の中はもう、ちょっとしたパニック状態だった。

銃をあれこれ手にしながら横目でチラリと浴衣姿の二人を見る。ああだこうだ談笑しながら人形やらゲームやらを狙っているようだ。

優花ちゃんの変な事を言うから、やたら京香ちゃんの顔ばかり気になってしまうじゃないか。しかもドキドキが止まらないし。



浴衣の二人は、射的が全然なっていなかった。僕は、その事がだんだん気になりだす。

射的は標的を倒すだけじゃなく棚から落とさなきゃ駄目だから、慎重に狙う物を選ぶ必要が有るし、狙う位置も大切なんだ。そう伝えたかったが、僕は言い出せなかった。

自分の銃をようやく選ぶと、コルクの弾をしっかりと詰め、射的台から思いっきり身体を乗り出した。出来る限り銃身を標的に近付ける事が大事だからだ。

そして僕の一番得意なターゲット、ジッポのライターに狙いを付ける。狙うのは上の角の部分。倒れた時に回転をかけて、棚の下まで落ちるようにするのだ。

こうやって僕は毎年、一度のチャレンジでジッポのライターを二、三個は取っている。

パンッ！

たった一発で、狙い通りジッポは棚から転げ落ちた。

「和弥、やったじゃん！」

僕の後ろから優花ちゃんの声が聞こえた。振り返ると、いつの間に弾を使いきってしまったのか、二人の浴衣姿がそこに有った。

「すごい！」

京香ちゃんもびっくりしている。

僕は少し照れくさいのと同時に、ちょっとだけ得意な気持ちになった。調子に乗って次を狙う。またまたジッポだ。

思いっきり身体を伸ばして狙いを定めると、コルクの弾は寸分の狂いもなくジッポの角を射抜いた。棚から転げ落ちるジッポ。連続ゲットに的屋のおじさんも少し驚いている。

今日はけっこう調子がいいかもしれない。

「マジすごい！ 二個連続だよ！」

「すご過ぎるーっ！」

二人とも本気で感心して盛り上がっている。

「じゃあ今度は、ゲーム取ってよ、ゲーム！」

いきなり優花ちゃんが難題を言い出した。

「えっ?! それは無理だと思うんだけど……」



普通に考えてゲームなんて落ちる訳がないだろ！ あんな重い物、コルクの弾で動くかよ！ 僕が困った顔をしているにも関わらず、優花ちゃんは続ける。

「大丈夫だよ。和弥ならイケるって！ ね、京香ちゃん！」

「う、うん。イケるかも」

京香ちゃんまで……。

僕は理由を説明するのや言い訳するのが面倒だったので、とりあえず撃ってみる事にした。

きっと、残りの弾は全部無駄に終わるだろう。でも、もうすでにジッポを二個取ったから、まあいいかと思ったのだ。

それに、万が一という事が有れば一躍大ヒーローだしね。

「じゃあ、どれ狙う？」

僕は半ば呆れて聞いた。

「京香ちゃんはどれがいい？」

優花ちゃんがそのまま京香ちゃんへと振る。

「え、私？ えーと……、じゃあアレ」

京香ちゃんが指さしたのは、今流行のゲーム機の本体だった。

うわっ！ マジ?! あんなの神でも無理!! 僕は心の中でそう叫びながらも銃口に弾を詰め込んだ。

台の上から身を乗り出して銃身を標的の箱の右上の角に突き付ける。狙いを澄まし引き金を引いた。

案の定、呆気なくコルクの弾ははじかれてしまった。ビクともしない。

僕は溜め息をついた。取れる可能性の無い物に無駄に弾を使ってどうするんだよ。もっと現実的な物にしろよな。僕は心の中でそう叫んでいた。

気が変わる事を期待して浴衣の二人に視線を向けた時、僕は自分の方が観念せざるを得ない事を知った。

両手を胸の前で組み、祈るような浴衣姿の女の子二人。

こんな状況では断れないよ、僕は。

きっと弾を使い切っても取れなくて、二人をがっかりさせちゃうんだろうな……。がっかりした二人の顔が目には浮かぶ。

あーあ、僕はなんではっきりと断れないんだろう……。



残りの弾は、あと三発。もう一度箱の右上を狙い引き金を引いた。箱に跳ね返された弾が、ポーンと高く上がりすぐ目の前に落ちた。

やっぱり駄目だ。あと二発。相変わらず浴衣の二人は手を組んで祈っている。僕は駄目だと分かっているのに、やらなきゃいけないという事が少し辛かった。

今度は箱の左上角を狙ってみる。どうせ同じだろうけど、と思いながら引き金を引く。

やはり弾は、はじかれてしまったが、今度は当たった音が少し違った。さっきは、パッ、という全く響かない音だったが、今のは、パンッという少し箱の中に響いた音だった。それにやや箱も揺れたように見えた。

僕は身体を左側に移動して箱の側面を覗き込んでみた。

薄暗くて分かりにくいけど、じっと目を凝らして見ると、箱の左側から後ろにかけて若干へこんでいるようだった。

そうか！ それで箱が不安定になって揺れたのか。僕は先ほどまでビクともしなかった箱が揺れた理由に納得した。と同時に微かな希望を見出した。

全く可能性が無いわけじゃないかもしれない！

最後の一発を丁寧に銃口に詰め込みバネを引くと、もう一度、横から箱の状態を確認する。

よし！ と心を固め銃を構えた僕の顔付きは、先程までとは、きっと別人だったに違いない。

落ちろっ！

気合いと共に、僕は標的を撃ち抜いた。

射抜かれたその箱はバランスを崩すと、スローモーションのように、ゆっくりと後ろに倒れていった。周りからオオーッと声上がる。



「やった！！」

優花ちゃんと京香ちゃんが同時に叫んだ。

僕はしゃがみ込んでいた。

的屋のおじさんが話しかける。

「いやー、惜しかったねー！ ゲーム機取られたかと思ったよ」

ニコニコしているその顔が、僕は少し憎らしいと思った。

「えーっ？ 駄目なの？ どうして！？」

納得いかないのは浴衣の二人だった。

「え？ 棚から落ちないと駄目なの？ そんなのズルいよーっ！」

「そういうルールだからね。そこの僕は分かっているみたいだよ」

的屋のおじさんに言われて、二人は地面にしゃがんだまま落ち込んでいる僕にやっと気が付いた。

「そうなんだ……。マジ残念だったね、和弥」

「和弥くん、あんなに頑張ったのに」

悔しかった。もともと無理な標的だったけど、でも、無性に悔しかった。

「和弥くん、ありがとう」

そんな京香ちゃんの手が、なんか妙に嬉しかったんだけど、僕は悔しい気持ちとゴッチャになってしまい、うまく言葉に言い現せなかった。

「え、いや、その……、いつかきっと、あのゲーム機取ってやるからさ」
視線を逸らしながら言った一言。それが精一杯だった。



その後なんとなく、そのまま三人でお化け屋敷に行った。

オドロオドロしい看板の下の入り口付近にはお化けの人形が幾つか飾られていたが、意外に作りが雑で子供騙しだなと思った。三人で入ってみる事にする。

入ってすぐの幕の裏側に回ると赤い小さな太鼓橋が有って、そこを渡り切った所でいきなり上からろくろ首が舞い降りて来た。優花ちゃんと京香ちゃんがキャッと僕の後ろにしがみつく。意表を突かれたので、思わず僕もビクッとしてしまった。

進むに連れて辺りはどんどん暗くなって、ついには人魂が飛び交い始める。

お墓の陰からは青い光に幽霊がポーッと浮かび上がり、左に右に上にと、怪談映画で見た妖怪やお化けが次から次へと、鳥肌を立たせる効果音と共に、恨めしい声を上げて現れた。

優花ちゃんは僕の後ろにしがみついたままギュッと目をつぶっていて、何か物音がする度にキャーキャーと悲鳴を上げる。見えてないんだから何もそこまで怖がらなくてもいいんじゃないかと思うのだけど。

それにつられ京香ちゃんもしがみついて叫ぶものだから、その度に引っ張られる僕のTシャツの背中はずっと伸びてしまった。

木の板で作られた細い通路はやたらに上下していて、下駄を履いている浴衣の二人はゆっくりとしか進めない。

その上、所々地面がスポンジになっているらしく、足元がグニャリとへこむので、その度にキンキンとした悲鳴が僕の耳にステレオで響く。

最後の方で壁から何本も手が出て来たのだけど、随分乱暴だったので、僕は頭に来て両手で思いっきり引っ張ってやった。

うわっ！という声が出て走り去る足音が聞こえたところを見ると、お化けではなく、となりの通路の客だったのだろう。ざまあみろだ。

ようやくの事で張り付いた二人を引きずって出口を出ると、外は涼しくてとても気持

ちが良かった。思わず深呼吸する。

それにしても、いつも男勝りな優花ちゃんが意外にもお化けが苦手だなんて。僕はめちゃくちゃウケてしまった。



僕も、まあ、お化けは得意じゃないけれど、女の子二人が後ろから付いて来ているのに格好悪いところは見せられないから、ちょっとだけ頑張った。

「和弥、学校のみんなには内緒だからね！」

それまでギュッとしがみついていた両手を離すなり必死な顔で口止めするその姿に、優花ちゃんってけっこう面白い子だなと思った。

僕が黙ってても、きっとそのうちバレるだろうとは思うけどね。

いくつか屋台を回った後、三人でかき氷を食べた。三種類の味にして、三人でお互いの器を突つき合った。

いつもの男友達とワイワイ騒ぐのとは違った新鮮な楽しさ。こういう楽しさは初めての事だった。

一人で祭りを楽しむはずの予定が狂ってしまったけれど、女の子と一緒にのお祭りも、まんざら悪くないかもしれない。

でも、浴衣姿の女の子って、なんでこんなに良い香りがするの
だろう??



僕が二人の顔を見て笑いかけた時、いきなり左肩が強く後ろへと引っ張られ、持っていたかき氷の器が地面に落ちて、白い氷と赤いシロップがビチャリと無惨に飛び散った。

「おい、和弥！ こんなところで何やってんだよ、お前？」

後ろを振り向いた僕の目の前には、親友の亘と、その両側に二人、同級生の男子の顔が並んでいた。三人の表情からは明らかに怒りが見て取れる。

「え……？ 何って……」

「お前、俺らとお祭り行かないって言ってたくせに、なんだあ？ 女の子とお祭りデートかよ？ おい！」

「ち……、違うよ……」

そんなつもりは無かったが、言われてみれば、結果的にそう見えてしまっても仕方ないと思った。

「ちょっと、やめなさいよ！」

そこに優花ちゃんが割って入る。もともと男勝りだし、身長も大きい方なので、学校の中のちょっとしたいざこざと同様に、簡単に止められると思ったようだった。

しかし、この日の亘は本気で怒っていた。

「どけっ！」

クラスでも特に大きい方の亘は、右腕で強引に優花ちゃんを押し分けると、僕の二の腕を掴み力任せに引っ張って行く。

すぐに優花ちゃんが追いつこうとするが、他の二人の男子に行く手を塞がれてしまった。

亘は振り返りもせず、僕を境内の裏に引っ張って行く。

人気の無い所まで来ると、亘は手を離した。

「おい、どういう事なんだよ？」

少し音量を押さえつつも凄みを効かせた声。亘の、こんな声は初めて聞いた。

「ど、どうって……」

いきなり亘が、僕の胸を右の手の平で突いた。二、三步、僕が後ろへよろけると、すぐさま亘は詰め寄る。

「お前、たまには一人でお祭りに行きたいとか言ってたよな？ それがなんだよ、優花とデートかよ！？」

「ち……、違うよっ！」

僕は少し後ろめたさが有るせいか、亘の顔を見る事が出来ない。

「違わねーだろうがっ！！」

僕よりも身長が十センチ以上大きい亘の声は、頭の上から聞こえる。さっきよりも強く胸を突かれ、今度は後ろに転がってしまった。



「痛ってえ……」

転んだ時に尻と肘を石畳に打ち付けてしまった。地面についた両手も擦りむいたのかヒリヒリする。

「優花と楽しそうに腕組んでたじゃねーか！ ずーっと見てたんだぜ！」

暗がりに、亘のシルエットが腕を組んでジッと僕を見下ろす。

「……ずーっと？」

三人揃って、ずっと僕の後をつけてたって言うのか？

「射的の所からずっとだ！ 女二人連れて、随分いい気になってたよな？」

暗闇で良く見えなかったが、亘の口元が嘲笑で歪んでいるであろう事は感じ取れた。

なんだか少し腹が立った。

「優花ちゃん達とは射的で偶然一緒になったんだよ！ 見てたんなら分かるだろっ！」
僕は立ち上がると逆に詰め寄り、亘の顔を見上げ睨みつけた。

「じゃあ、なんでその後も一緒だったんだよ？！ お化け屋敷で腕まで組んじゃってさ！ 一人で楽しむんじゃなかったのか？！」

「腕組んでって……、あれは優花ちゃんがお化けがすごく苦手だって言うから……あつ……」

優花ちゃんに口止めされていたのを、つい忘れていた。

「ケッ！ そんな見え透いた嘘、アホか！ あの、おとこ女がお化けなんか怖がるわけないだろ！」

亘は、いかにも呆れたという態度で言葉を吐き捨てる。

「嘘じゃないって！ 本当は口止めされてたんだけど、優花ちゃん、お化けがマジで苦手らしいんだ」

「フン。ちっ……」

亘が舌打ちをする。

一瞬の間が空いた。少しだけ亘の勢いが収まったのを感じたので、僕は率直な疑問をぶつけた。

「でもさ、仮に僕が優花ちゃんとデートしてたとしてさ、なんで亘、君がそんなに怒るわけ？」

「え？ それは……、だから、お前が俺達を裏切ったからだろうが！」

僕は亘が一瞬狼狽えたのを見逃さなかった。

「それだけ？ 他にも何か理由が有るんじゃないの？」

「な、なんだよ。別に他に理由なんかねえよ……」

言葉の歯切れが更に悪くなった。絶対に何か隠している証拠だ。僕はカマをかけてみる事にした。



「亘、君さ、ひょっとして優花ちゃんの事、好きなんじゃないの？」

「なっ、何、バカな事言ってんだよ！」

動揺を隠せない亘に、僕は容赦なく詰め寄る。

「僕が優花ちゃんと仲良くしてるのを見て、ヤキモチ焼いたんじゃないの？」

「だ、誰が、ヤキモチなんて！」

僕は確信した。亘の奴は、どうやらマジで優花ちゃんの事が好きなんだ。幼なじみ同士の僕と優花ちゃんが仲良くしているのが、きっと面白くなかったのだろう。

今度は僕の方が嘲笑しながら言ってやった。

「ふーん、君の気持ちはよく分かったよ。僕が裏切ったとかなんとか勝手な言いがかかりつけといて、結局のところは、優花ちゃんを僕に取られると思ったからなんだろう？
！ セコい奴だなっ！」

「なっ、なっ、なんだとお！？ この野郎っ！」

亘の左手が伸びて僕の襟首を掴んだ。負けずに僕も亘の襟首を掴み返す。

押されれば押し返し、ど突けばど突き返す。一進一退の攻防。

お互いに意地を張って引くに引けない状況に陥ってしまい、僕らの青臭い祭りの準備は、暗闇の中、そのままいつまでも終わる事を知らなかった。



～ 五年後 ～



「和弥、まだかよ？」

玄関から亘が覗き込む。

「わりい、お待たせっ！」

ヘアワックスでようやく気に入った髪型を創った僕は、着慣れない浴衣の裾を気にしながら、玄関から暮れかけた外へと飛び出した。

「優花たち、お前が遅いから先に行っちゃったよ。何処に居るのかな？」

同じく浴衣姿の亘が、ペタペタと雪駄の音をさせながら携帯でメールを打つ。

「どうせ射的あたりだろ。間違ってもお化け屋敷には居ないよ」

「そりゃそうだ。優花のやつ怖がりだからな。みんなと一緒にじゃなきゃ絶対行かないよ。俺と二人でもイヤだって言うし」

「お前が頼りないからだろ？」

「え？ それを言われるとツライんだけどな。俺もお化けマジで苦手だからさ。と言うわけで和弥、今日もお化け屋敷の先頭頼むわ」

僕も、お化けはあんまり得意なわけじゃないんだけど、何故かいつも必然的にそういう役回りになるんだよな、昔から。

歩道には、神社のお祭りに向かう人々が溢れんばかりに行き交う。

浴衣を着た子供を連れたファミリー。若いアベック。年配の夫婦。老若男女問わず、皆、お祭りを楽しみにしているのだ。

自転車に乗った高校生の一団が後ろから横を通り過ぎて行く。

「おう！ 亘と和弥じゃねえか！ 一緒にお祭りに行こうぜ！」

バスケ部の山崎先輩だった。

「いや、いいッスよ。連れが待ってますから」

亘が面倒臭そうに応える。

「連れ？ 女か？ 先輩よりも女かよ？ ふーん、まあいいや、じゃあな」

「どうもッス」

僕らは軽く頭を下げて見送った。



その時、タイミング良く亘の携帯にメール着信の派手な音楽が流れた。優花のお気に入りの曲だ。

「お、やっぱり射的だって。早く行こう！」

亘と僕は歩調を速めた。

先を急ぐため林の中の近道を通り、少し暗がりになっている境内の裏手へと抜ける。
すると見覚えの有る石畳が現れた。
亘が歩を止める。



「和弥、あの時はすまなかった」

「え？」

「五年前の事だよ。ここで殴り合いしたろ？」

ここは……、そうだ。あの時、僕と亘が初めてマジで殴り合いの喧嘩をした場所だ。

それまで掴み合いの喧嘩くらいしかした事が無かった僕は、あの時初めて人の顔を殴ったんだ。そして殴られた。

鼻血も出たし、口の中も切ったし、顔も酷く腫れたっけ。でも、一番痛かったのは自分の心だった。そして親友を殴った拳だった。

「あ、ああ。そう言えば、そんな事もあったね」

だんだん記憶が蘇って来る。

そうだ。お祭りが終わる時間になってもなかなか帰らないものだから、両親が心配して捜しに来て、二人殴り合っている所を見つけて、こっぴどく怒られたんだっけ。

「あの後、お前が色々、優花との間を取り持ってくれたからさ、ようやく俺は優花と付き合う事が出来たんだ。お前のお陰だ。マジで感謝してる」

「ああ、ほんと良かったよ。優花、最初は亘の事、あまり好きじゃなかったんだよな。亘の良い所を分かってもらうのに、だいぶ時間かかっちゃったね」

薄暗い中、亘が微笑んでいるのが、なんとなく伝わって来る。僕も自然に微笑みが浮かび、亘の背中を右の手の平で軽く押した。

「さあ、優花達が待っているよ。急ごう！」

「あー、もうっ！ また駄目だわ！ 悔しーっ！」

台の上に射的の銃を投げ出し、アップにした髪を直す優花の頬は、水色の浴衣とは好対照に、悔しさのために上気し、少し紅潮していた。



「じゃ、今度は私がやってみるね」

京香は銃口に弾を詰め、藤色の浴衣の袖を捲って真っ白い二の腕を露にすると、棚の最上段を狙った。

パンッ！

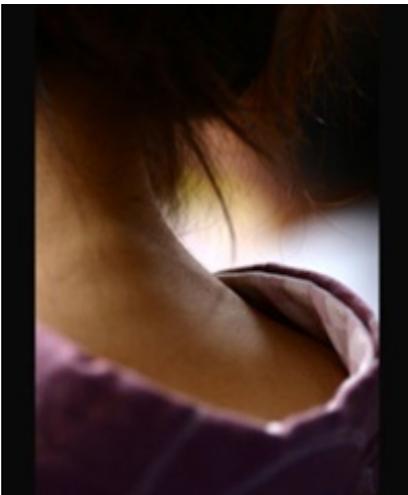
呆気なくコルクの弾は跳ね返って床に転がった。

「やっぱ無理なのかなあ」

残念そうに、そう言う京香の細い肩に、僕は後ろからそっと腕を回した。

「お待たせ」

京香が僕に笑顔を向ける。また一段と綺麗になったような気がする。その結い上げられたうなじの辺りからは心地よい香りが漂い、僕の鼻腔と心の琴線を震わせた。



「あ、和弥。あれお願い」

僕に向かい微笑んだ京香が指差したのは、ゲーム機の大きな箱だった。

「和弥、取ってやれよ！ お前ならきっとイケるっ！」

隣で、亘と優花が肩寄せ合いながら親指を立てている。この二人、浴衣でのツーショットが意外に似合っている。

僕は言葉の代わりに笑顔で応えた。

京香から銃を受け取り、早速コルクの弾を詰め込む。

そして射的台から目一杯乗り出すと、大きな標的に狙いを定めた。

「昔からの約束だからな」

僕の撃ち放ったコルクの弾は、そのゲーム機の箱を大きく揺らした。

僕達の青い祭りは、まだまだ始まったばかりだ。